

4-1-5-5 アレルギー科

1.概要、特色

アレルギー科は小児のアトピー性皮膚炎、食物アレルギー、気管支喘息などをはじめとして様々な小児アレルギー疾患の診療を行っている。現在の日本ではアレルギー疾患の子どもたちはとても多いため、ほとんどの小児科医にはアレルギー診療の心得がある。そして、軽症患者の大半は年齢とともに自然軽快していく。しかし、一方で、自然治癒が期待できない重症患者の存在があり、通常の診療とは異なる水準の対応が必要となる。重症患者とその家族は日常生活に支障をきたし、なかには生命の危機に直面するものもいるからである。国立成育医療センターアレルギー科では、一般的な治療ではコントロールすることが困難な患者を救うことを重要な任務の一つと考えている。そのため、当科の初診時患者構成は重症と中等症が圧倒的に多く軽症患者が少ないという特色がある。もう一つの重要な任務は、新しい標準治療法の開発である。アレルギー疾患の治療は日進月歩であるが、最も副作用が少なく最も効果の高い治療とはどのようなものか、それを知るには現在優劣がつかない複数の治療法を比較する必要がある。このような臨床研究には的確な研究デザイン、倫理委員会の審査、インフォームドコンセント、個人情報保護への配慮等、非常に複雑な手続きを必要とする。そのため、こうした臨床研究は今までの日本では製薬メーカーの新薬開発研究以外ではほとんど行われてこなかった。しかし、こうした壁を乗り越えて臨床研究を行わなければ、欧米で開発された標準治療法の真似をするか経験的な治療法に固執することになる。専門家の経験に基づく不毛の議論で犠牲となるのは患者である。権威を傘に着た議論ではなく科学的な手続きによって、日本の患者にとっても最もよい治療法を開発することがアレルギー科の使命と考えている。

2.診療

2.1 治療方針

アレルギー科では以下に掲げる3つを基本的理念として診療活動を行っている。

(a)Evidence-based Medicine (EBM: **根拠に基づく医療**): 日本だけではなく、海外からも最新の情報を収集し、最も Evidence の水準の高い知見に基づいた治療を提供する。また一方で将来のガイドラインの改定に必要な Evidence を創出するため、臨床研究を企画・実施する。

(b)Narrative-based Medicine & Patient Oriented Medicine (NBM & POM: **患者中心の医療**): 治療方針を医師が一方的に決めるのではなく、まず患者の立場に立って傾聴し、ニーズを正確に把握する。その上で双方が納得して治療を行う。

(c)Behavioral Medicine (**行動医学**): 従来の生物医学モデルに基づく薬物療法中心の医療ではなく、生物心理社会医学モデルに基づく包括的な医療を目指している。特に重症患者や難治性患者の治療には不可欠のアプローチで、アレルギー診療の分野では世界の最先端をリードしている。

2.2 対象疾患

アレルギー科は様々な小児アレルギー疾患の診療を行っているが平成 15 年度に診療を行った主たる疾患を列記する

- 1) 気管支喘息、およびそれに合併したアレルギー性鼻炎や副鼻腔炎
- 2) アトピー性皮膚炎およびその合併症
- 3) 食物アレルギー（運動誘発性食物依存性アナフィラキシー、アレルギー性胃腸炎を含む）
- 4) IgA 欠損症、高 IgE 症候群など免疫異常を伴うアレルギー疾患
- 5) ラテックスアレルギー、口腔アレルギー症候群（OAS）
- 6) 多型滲出性紅斑、蕁麻疹、自家感作性皮膚炎、接触性皮膚炎、薬物アレルギー
- 7) 昆虫アレルギー、動物アレルギー

2.3 疾患教育

- 1) アトピー教室：アレルギー科を受診したアトピー性皮膚炎患児の養育者向けに毎週木曜日に医師および看護師が行った。
- 2) 喘息教室：アレルギー科を受診した気管支喘息患児の養育者向けに毎週火曜日午前中に医師および看護師が行った。
- 3) 子ども向けアトピー教室：主として小学校高学年以上の患児を対象に夏休みおよび春休みに数回実施した。医師、看護師、心理士が担当
- 4) 子ども向け喘息教室：主として小学校高学年以上の患児を対象に夏休みおよび春休みに数回実施した。医師、看護師、心理士が担当

2.4 構成員（平成 15 年 4 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日の間に在籍した者。研修見学者は除く）

医師：大矢幸弘、野村伊知郎、須田友子、渡辺博子、成田雅美、赤司賢一、明石真幸、二村昌樹、Jonathan Batchelor、心理士：益子育代、松本美江子、小嶋なみ子

3. 研修

3.1 病棟カンファレンス

毎週月曜日の朝 8 時 - 9 時、毎週木曜日の午後 4 時 - 7 時に病棟患者のケースカンファレンスを医師および心理士を中心に定期的に開催。そのほかに病棟別の個別のケースカンファレンスを医師、看護師、心理士、ケースワーカーなどを交えて、非定期的に行った。

3.2 外来カンファレンス

隔週金曜日の午後に外来看護師、医師、心理士を中心に定期的に開催。

3.3 抄読会

毎週火曜日の午前 8 - 9 時に最新の臨床研究論文の紹介や学会報告などを定期開催。

3.4 院内勉強会

各病棟における看護師または他の部署からの要請に応じて気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどの勉強会を開催

3.5 外部研修生の受け入れ

他施設の医師、看護師、心理士、薬剤師、大学院生、医学生などの研修および見学を受け入れた。

3.6 院外研修会（学会発表は業績集に別掲）

- 1) 平成 15 年 8 月 22 日 大矢幸弘 小児精神保健医療研修会：誤解を解こうアレルギーと心身症 埼玉県大里福祉保健総合センター
- 2) 2003 年 9 月 3 日 大矢幸弘 杉並区実務研修会：食物アレルギー 東京都杉並区
- 3) 平成 15 年 9 月 17-19 日 大矢幸弘 臨床心理学特講 久留米大学文学部

3.7 公開講座および研修会

- 1) 平成 15 年 8 月 10 日 公開講座 アトピー性皮膚炎の EBM 大講堂
- 2) 平成 15 年 10 月 16 日 成育アレルギー臨床懇話会 大講堂
- 3) 平成 16 年 2 月 19 日 成育アレルギー臨床懇話会 大講堂

4. 研究活動

- 1) 住居内空気汚染等とアレルギー疾患との関連に関する疫学的研究（分担研究、厚生労働科学研究費補助金 健康科学総合研究事業）
- 2) アトピー性皮膚炎の既存治療法の EBM による評価と有用な治療法の普及（分担研究、厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療等研究事業）
- 3) 成育医療における患者・家族の前方視的研究（分担研究 成育医療研究委託事業）

- 4) 小児科産科若手医師の確保・育成に関する研究 (研究協力 厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業)
- 5) 難病をもつ母体から出生した児の予後に関する研究 (研究協力 成育医療研究委託事業)
- 6) Develop an assessment tool enabling patients to ascertain the reliability of medical information on the worldwide web. (Y.Ohya, J. Batchelor) The Daiwa Anglo-Japanese Foundation